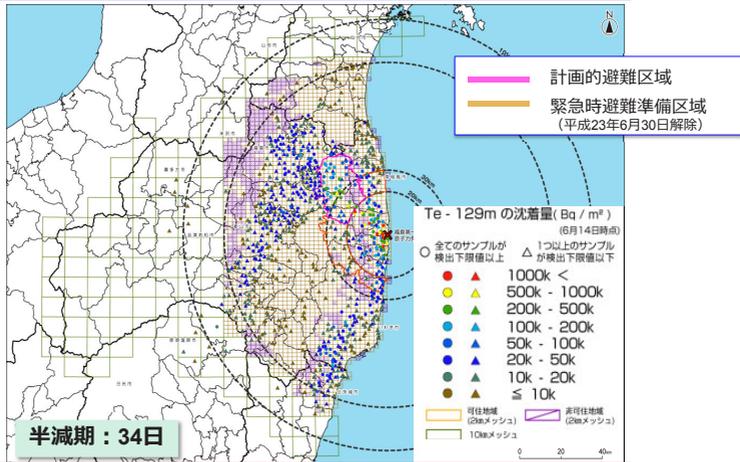


テルル129mの土壤濃度マップ (平成23年6月14日時点)



テルル129mは半減期が短いため、平成23年12月6日以降に実施された第2次分布状況調査において、全ての調査箇所で見出されなかった

Bq/m²: ベクレル/平方メートル

文部科学省報道発表 平成23年10月31日、平成24年9月12日

2011 (平成 23) 年 6 月に行われた国の土壤調査では、福島第一原子力発電所から 100km 圏内及びその圏外の福島県西部の土壤試料を採取し、γ (ガンマ) 線放出核種 (放射性セシウム、ヨウ素 131、テルル 129m、銀 110m) について核種分析が実施されました。その結果、テルル 129m (沸点 1,390 度) 及び銀 110m (沸点 2,348 度) が比較的広範囲に検出されました。

また、南方沿岸部の内陸の一部の地域では、セシウム 137 に対してテルル 129m の沈着量が高い傾向が顕著に現れました。

この理由としては、福島第一原子力発電所からの放射性物質の放出時期の違いにより、形成された放射性プルームに含まれるテルル 129m とセシウム 137 の比率の違いや放出された際の物理的・化学的形態が異なっていたこと、核種組成などが異なる幾つかの放射性プルームが通過したときの天候が異なっていたことなどが考えられます。

本資料への収録日: 2013 年 3 月 31 日

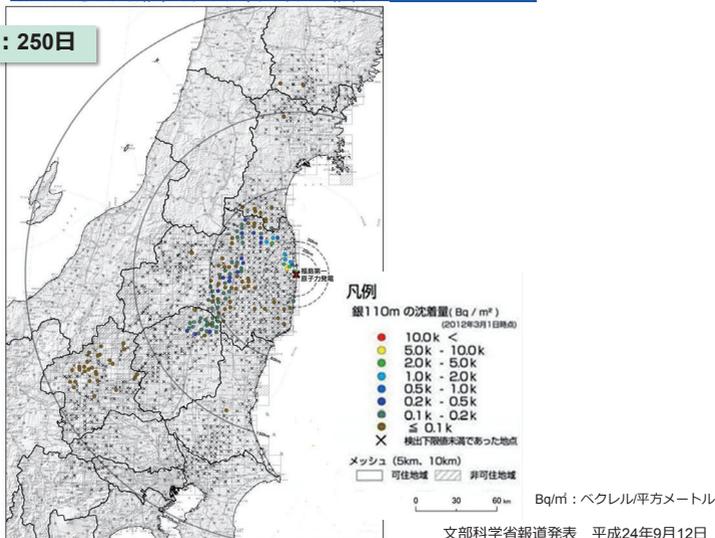
本情報は事故当時 (2011 年) の情報です。

関連 Q&A

- ・ 3 章 QA1 モニタリングの実施状況について教えてください
- ・ 3 章 QA2 セシウムをはじめとする放射性物質の汚染状況の調査はどうなっていますか
- ・ 3 章 QA3 農地土壤の放射性物質による汚染状況はどのようになっていますか
- ・ 3 章 QA4 物理減衰やウェザリング効果は、どの程度だと考えられるのですか
- ・ 3 章 QA12 雨水や日常食のストロンチウム 90 やセシウム 137 はどのようにすれば測れるのですか
- ・ 3 章 QA16 食品、上水中の放射性物質はなぜセシウム 134、セシウム 137 やヨウ素 131 の濃度しか発表されないのですか

銀110mの土壤濃度マップ (平成24年3月1日時点)

半減期 : 250日



2011 (平成 23) 年 12 月から 2012 (平成 24) 年 5 月にかけて行われた土壌調査では、福島県を中心とした東日本の広い地域において、可搬型ゲルマニウム半導体検出器を用いた in-situ 測定 (24 頁「Cs-134, Cs-137 (広域)」参照) により、放射性核種の土壌沈着量が測定されました。

2011 (平成 23) 年 6 月に行われた国の土壌調査では、福島第一原子力発電所から 100km 圏内及びその圏外の福島県西部の土壌試料を採取し、γ (ガンマ) 線放出核種 (放射性セシウム、ヨウ素 131、テルル 129m、銀 110m) について核種分析が実施されました。その結果、テルル 129m (沸点 1,390 度) 及び銀 110m (沸点 2,348 度) が比較的広範囲に検出されました。

本資料への収録日 : 2013 年 3 月 31 日

改訂日 : 2014 年 3 月 31 日

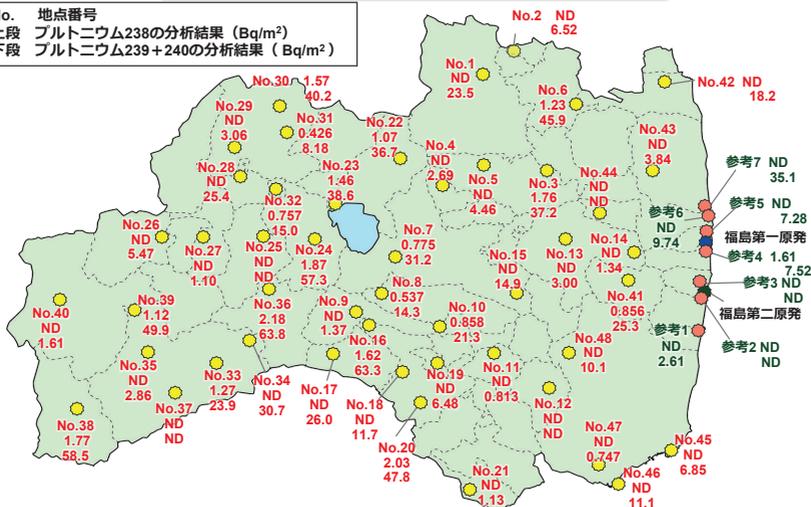
本情報は 2012 年の情報です。

関連 Q&A

- ・ 3 章 QA1 モニタリングの実施状況について教えてください
- ・ 3 章 QA2 セシウムをはじめとする放射性物質の汚染状況の調査はどうなっていますか
- ・ 3 章 QA3 農地土壌の放射性物質による汚染状況はどのようになっていますか
- ・ 3 章 QA4 物理減衰やウエザリング効果は、どの程度だと考えられるのですか
- ・ 3 章 QA12 雨水や日常食のストロンチウム 90 やセシウム 137 はどのようにすれば測れるのですか
- ・ 3 章 QA16 食品、上水中の放射性物質はなぜセシウム 134、セシウム 137 やヨウ素 131 の濃度しか発表されないのですか

プルトニウム238、239+240の分析結果（土壌）

No. 地点番号
 上段 プルトニウム238の分析結果 (Bq/m²)
 下段 プルトニウム239+240の分析結果 (Bq/m²)



Bq/m² : ベクレル/平方メートル 平成24年4月6日 原子力災害現地対策本部（放射線班）、福島県災害対策本部（原子力班）

「福島県における土壌の放射線モニタリング調査計画」に基づき、2011（平成23）年8月10日～10月13日に採取された県内の土壌について、プルトニウム238、239+240の分析が行われたところ、調査地点（48地点）については、放射性物質が全て事故発生前の国内の調査結果の範囲内であったこと、プルトニウム238とプルトニウム239+240の比率が事故発生前の全国平均（0.0261）とほぼ同程度の比率であったことから、事故由来のものではないと考えられています。

なお、福島第一原子力発電所周辺の参考調査地点（7地点）のうち、1地点（大熊町大沢）については、プルトニウム238とプルトニウム239+240の比率が0.214と全国平均（0.0261）より一桁高い比率となっていることから、福島第一原発事故の影響の可能性が考えられます。

本資料への収録日：2013年3月31日

改訂日：2014年3月31日

本情報は2012年の情報です。

関連Q&A

- ・1章 QA16 福島原発周辺で検出されたプルトニウムの量は、事故前に検出されたプルトニウムの量に比べてどうだったのでしょうか
- ・1章 QA17 プルトニウム241が放出されることは予測されていなかったのでしょうか
- ・1章 QA18 平成24年3月8日に発表された論文において検出されたプルトニウム241の結果から、どれくらい被ばくすると考えられますか
- ・1章 QA32 東京電力福島第一原子力発電所の敷地内で微量のプルトニウムが検出されたようですが、健康への影響はありませんか
- ・1章 QA48 プルトニウム241の食品への移行が気になります
- ・3章 QA21 昔の核実験でできた放射性物質が今も残っているというのは本当ですか
- ・3章 QA23 1980年まで行われていた大気圏内核実験で生成したストロンチウム90やセシウム137が、現在でも一般の環境に残っているのは、なぜですか
- ・その他：1章 QA13、3章 QA1～4、3章 QA14～16